

皆さん、卒業おめでとう。ご父母をはじめとする関係者の皆様、お子様たちのご卒業、おめでとうございます。

春の息吹が感じられる時節を迎えた本日、ここに、人文科学研究科博士学位取得者一名、同修士号取得者七名、文学部二八三名、社会学部二二八名の卒業生の皆さんを迎え、ご来賓各位のご臨席のもと、卒業の式を挙行できますことは、私たち武蔵大学の教職員、在学生にとって大きな喜びであります。

石川久美子さん、博士号の取得おめでとうございます。石川さんは、「歌が語る歴史―歌謡から読み解く『古事記』そして万葉歌」という題で博士論文を執筆され、その独自性が高く評価されて博士号を授与されました。修士号を授与された七名の方も含め、大学院修了の方々が、将来、それぞれの研究領域で優れた論文を執筆され、ご活躍なさることを心より期待しております。

さて、学部を卒業される皆さんは、今から四年前、二〇一三年の四月に、この大講堂で入学式を迎えられました。入学式では、当時の清水数学長が式辞を、有馬明人学園長が祝辞を述べられました。どんな内容だったか覚えていますか。

お二人の先生とも、本学の母体となった旧制武蔵高等学校の建学の三理想についてお話になりました。三理想の内容については、あとで、有馬先生が詳しく述べられると思いますので、ここでは短く紹介しておきます。一つ目は「東西文化の融合。つまり欧米の文化とアジアや日本の文化を融合することができ人物を育てること」です。二つ目は「世界へ雄飛することができ人物を育てること」。そして、三つ目が「自ら調べ自ら考えること」です。この三理想は、旧制高校から新制大学に変わっても、ずっと受け継がれてきましたし、今も本学の基本的な教育の原点であることには変わりありません。

今から十一年前、武蔵学園将来構想計画が定められた際に、武蔵大学は、この三理想をもとにして、「知と実践の融合」という新たな教育の基本目標を定めました。

皆さんのご卒業に際して、改めて、この「知と実践の融合」についてお話したいと思えます。「知と実践の融合」は、「自立、対話、実践」という三つの言葉に濃縮されています。

最初の「自立」とは、「自調自考」の精神であり、「自ら調べ自ら考える」ことです。これは今述べた旧制武蔵高校の建学の三理想の一つでもあります。皆さんは、ゼミナールを始めとする武蔵大学の少人数教育の中で、また、卒業論文やゼミ論文を書く中で、この自調自考、自ら調べ自ら考えるという態度をしっかりと身につけてこられたと思います。

二つめの「対話」とは、相手を自分と同じ人間として認め、どのような生まれの相手であろうとも偏見を持つことなく、差別することなく、対等な立場で話しあうことです。また、相手の痛みを自分の痛みとして、その痛みを共に分かち合うことでもあります。さらにまた、相手の喜びを自分の喜びとして共感しあうことでもあると思います。出自の異なる人や自分と意見や趣味の合わない人とも、多様性を認め合い、共に支え合って生きていくことのできる対話力、共感力が大切です。

そして三つ目の「実践」とは、「世界に思いをめぐらし、身近な場所で実践すること」です。これに関して、一つの標語をご紹

介したいと思います。一九七〇年代の欧米の環境保護運動の中で広まった標語で、「Think Globally, Act Locally」という言葉です。「Think Globally, 地球規模で物事を考え、Act Locally 今、あなたが生きている場所で実践しなさい」という意味です。私たちが毎日飲んでいる水も、酸性雨をはじめとした地球規模の環境汚染と無関係ではありません。今、皆さんが着ている服も、今朝、食へてこられた朝食も、グローバル化と無関係ではありません。私たちが、二一世紀社会を生きるということは、いやおうなく、世界とつながらざるを得ない、ということを意味しています。皆さん一人一人の個人的な生活が、実は地球規模の問題と直接的に関わっているということを、常に忘れないで頂きたいと思います。

今、日本のどの大学でも、国際化とかグローバル化という言葉がさかんに使われています。武蔵学園では、二〇一四年の春に根津公一理事長がドクトリンを示され、「まなざしを世界に向け、二十一世紀の課題を担う国際人を育てること」が、本学園の経営戦略であるとされました。この理事長ドクトリンを受けて、同年秋には「学園長プラン」が公表され、「武蔵学園は、学園創立百周年を目標に、大学・高中とも、世界に開かれたリベラルアーツの学園となることをめざす」とされました。このドクトリンとプランをもとに、大学でも新しい中期計画を定め、今年度から「異文化を理解し、未来を創造する教養あるグローバル市民の育成」を目標にその実践に取り組んでいます。

では、ここで言う「国際人」、「グローバル市民」とはどのような人のことでしょうか？

武蔵大学の国際化にとって重要なのは、今までお話ししてきた、「知と実践の融合」という精神です。武蔵大学の国際化とは、単に外国語に堪能であるとか、海外で活躍できる人材を育てるという意味だけではありません。それは、自立、対話、実践という本学の教育の基本目標を具現できる人材の育成に他なりません。

ここで、一人の卒業生の活動を、ご紹介したいと思います。一九八六年に経営学科を卒業された三十四回生の角田寛和さん、通称ツンさんという方です。ツンさんは千葉県柏市で靴屋さんを営まれているサッカーフリークのお父さんです。彼は、東日本大震災の当日、津波によって町が押し流されていく映像をテレビで見て驚愕します。あの時の衝撃は私も同様ですし、皆さんも同じような衝撃を受けられたことだろうと思います。ツンさんは、被災地の続報が続く中、避難所の子供達の靴が足りない、裸足だということに気がきます。それまでボランティア活動などには全く関心がなかったツンさんでしたが、衝動的に「店の倉庫にある靴を届ければ役に立てる」と思ったそうです。ツンさんは、被災から一週間後、まだ、福島原発の事故もどうなるかわからず、交通の安全性も確保されていない中で、ワゴン車に靴を満載にして、被災地に向かい、被災地の子供達との交流が始まります。その後も毎月のように被災地をおとすれ、被災状況や復興の様子をビデオに撮り続けます。そうした交流の中から、ツンさんは、二つのことを思い立ちます。一つは、サッカーを通して被災地の子供達を元気づけようということ。もう一つはマスメディアが伝えない現地の日常を、全国の支援者や世界の支援者に、感謝の気持ちと共に、伝えようという活動でした。その活動報告は、既に三百回近くに及び、その半数以上が海外での報告だそうです。二〇一四年のワールドカップでは、牡鹿中学校の子供たちをブラジルに連れて行き、感謝の気持ちをこめてソーラン節を披露したり、一昨年のネパール大地震の直後にも、現地に支援物資を運びながら、ネパールの子供達に東北の復興の様子を伝えるなどの活動を続けられています。また昨年には、福島県南相馬市の小中学生のマーチングバンド「SoSo プラス」のドキュメンタリー映画「MARCH」をプロデュースされたりもしています。この映画は、先月、ロンドンのインターナショナルフィルムメーカーフェスティバル

のドキュメンタリー部門でグランプリを受賞しています。

ツンさんは、「子供達に靴を」、「子供達と共にサッカーを」、という思いから出発して、現地での交流を通して、様々な復興支援プログラムを開発していきます。まさに自調自考の体現です。復興の状況をネパールを初めとする世界各地で、通訳を交えて伝え、現地の人々と交流していく姿勢は「心を開いて対話すること」に他なりません。そして、そうした活動全体が、被災地と世界をつなげる実践となっています。

ここでは角田さんという先輩の事例をお話しましたが、武蔵のOB・OGには、それぞれにユニークな国際人、グローバル市民として活躍している先輩がたくさんいらっしゃいます。皆さんが、こうした先輩たちに続いて、皆さん一人一人の個性を生かした地球市民として、素晴らしい人生を送られることを心から願っています。

皆さんは、今日、学生から同窓生へと立場は変わりますが、今後も武蔵ファミリーの一員であることには変わりはありません。学友との友情の絆をこれからも大切にしていってください。

武蔵大学は、経済学部経済学科の単科大学として、一期生六八名という、とても小さな大学としてスタートしました。その後、経営学科を増設し、人文学部、社会学部を作り、今では、毎年千人余りの卒業生を送り出しています。それでも卒業生の総数は、現在、四万六千人余りであり、一つのマンモス大学の学生数にもおよびません。しかし、だからこそ、卒業生たちの結束には、格別のものがあります。これからは、武蔵大学同窓会の一員として、同窓会の先輩諸氏との交流の輪を新たに作り出していってください。特に、地方で勤務することになる場合には、各道府県の同窓会に加入して、その地域での人脈を広げて頂きたいと思います。信頼できる先輩たちが、必ず皆さんを応援してくれます。ぜひ、皆さんから先輩たちに「私は武蔵の卒業生です」と声をかけてください。

さらにまた、私たち教職員や後輩たちのことも忘れることなく、これからも機会があれば、気軽に江古田のキャンパスや朝霞のグラウンドを訪れてください。

「自立、対話、実践」の精神を忘れることなく、伝統ある武蔵大学の卒業生であることに誇りを持ち、皆さんの輝かしい未来にむかって元気に進んで行ってください。

最後に改めて、皆さん、ご卒業おめでとう、ごいいます。

以上をもって、私からの式辞と致します。

平成二十九年三月二十二日